

カードの世紀

第198回

記憶に残るであろう北京オリンピックと私のオリンピック体験

「張家口」ってどんな所?

櫻井 澄夫

コロナ禍の中でも
どうにか無事に終了

北京で行われた冬季オリンピック（北京2022）もさまざまな話題を提供したが、心配された新型コロナウイルス感染症関連では大きな事態もなく、どうにか閉会式を迎え、パラリンピックが開始された。

私は日頃からスポーツにはそれほど関心はないし、昨年の東京オリンピックの際もあまりテレビを見なかったが、珍しく今回は日本選手の出場する競技のテレビ中継を眺め、眠い時は布団の中でラジオを聴き、競技の結果を確かめたこともあった。

これも多分にコロナ禍の「在宅」のおかげであろうが、わが人生で東京、横浜に次ぎ長く住んだことがある北京が開催地であったことや、訪問できなくてもオリンピックの期間中の北京の町の様子を眺めてみたいとい

う個人の好奇心と関心が加わったという事情もあった。

日本の女子カーリングのゲームもかなりテレビで観戦し、それまでよく知らなかったこの競技のルールも大体分かってきた。高梨沙羅さんも、羽生結弦さんも、小平奈緒さんも金メダルをとれずに残念だったが、日本の各選手はそれぞれ活躍し、ハラハラさせ、楽しませてくれた。

身長152センチと小柄な高梨さんがあのように高低差があるスロープを滑り、空中を舞うのを見て、高所恐怖症の私は感心することしきりだった。

オリンピック閉会直後に ロシアがウクライナに侵攻

しかし、閉会式からまだ日がたっていないのに、ウクライナへのロシア軍の侵攻という新たな問題が起き、私がこの原稿を書いている時点になり、プーチン大統領と習近平総書記との間

オリンピックを契機にして、現地事情、私の個人的な記憶も掘しながら、オリンピックとペイメントカードにまつわる話題を追っていききたい。

なお、私はこの連載の第50回、51回、52回（2008年11月号、12月号、09年1月号）に「カードから見た北京オリンピック」という文章を載せ、08年の夏季の北京オリンピック開催にあたっての北京の現地のカード事情について書いている。

08年のオリンピック 北京のカード加盟店網を整備

08年の北京オリンピックは、当初00年の開催を目指したが、投票でシドニーに破れ、2回後の08年になって実現したのだが、8年遅れたことが北京にとって、また中国でのペイメントカードや交通系カードの普及にとって、ある意味で大きなプラスの効果を与えた。なぜなら中国では21世紀に入ってから、い

わゆるキャッシュレス化が急速に進んだからだ。どちらも国家的な事業だから本腰が入り、多額の予算も付けられた。

北京や隣の天津市では特に来訪する外国人の利便を考慮、あるいは将来の観光客からの外貨収入を考慮して、開催の数年前から全市で会議を開き、計画的に、過去にオリンピックが開かれたどの国で、カード加盟店化率がどう推移したかを調べ、公表するなどして、それを目標にカードの受け入れ態勢を整えるよう公的に推進した。当然ながら加盟店端末機などの設置が進み、店での国内発行のカードの受け入れ態勢も進んだ。

ロシアに対する経済制裁で 国際ブランドが業務を中止

3月初めの日本のテレビ局のウクライナからの中継によると、ロシア軍の侵攻で現地のATMの前には大勢の人が列をくっつけているが、クレジットカー

ドはまだ店で使用できるとのことだった。しかし、その後のテレビや新聞での報道によると、経済制裁のためロシアではマスターカード、Visa、JCBなどが相次いで業務を中止した。JCBにはモスクワに事務所があり、現地の有力銀行との提携でJCBのマークが付いたカードの発行を行っている。こういういった差し迫った状況では、「現金なし」で支払ができるペイメントカードは役に立つことが予想あるいは期待されるが、他方、今回のような場合、経済制裁などの政治的、あるいは企業の事情、現地の事情によってカードが使用できなくなるような事態も考えられる。将来、機会があつたらそのあたりのも駐在員に聞いてみたい。

私は58年にキューバのアメリカ系のスーパーマーケットが発行したクレジットカードを所蔵しているが、61年のケネディ大

でオリンピック期間中はウクライナへの攻撃はしないという密約があつたと、アメリカの新聞が報道した。開会式に国としての参加が認められていないはずの国の大統領が特別に招かれ、開催国のトップと会見したというのだから、この説に信ぴょう性が増し、「合意」なのか、「付度」なのか、「配慮」なのか、あるいは「妥協」なのかは知らないが、「大国」の強硬な姿勢の前には、国家間の合意や国際組織での取り決めも何もあつたものではないと、世界の多くの人たちに思わせたであろう。その話題の国の軍隊が、オリンピックが終了した途端に、ウクライナに侵攻するというのだから、密約説に信ぴょう性を感じる人が多いのもやむを得ないだろう。そのような裏事情はともかく、従たる存在のパラリンピックは横に置かれたことになる

そこで、今回は、北京の冬季

統領の在任中に、いわゆる「キ

ューバ危機」でアメリカとキューバが断交したことにより、このような店は閉店して、カードは使用できなくなった。実に54年後の15年にオバマ大統領が就任して両国の国交が回復した時、アメリカのテレビ局は国交回復により、キューバでアメリカ発行のカードが使用できるようになることを報じていたことを知った。

その後、北朝鮮に対しては、アメリカが経済制裁したから、アメリカに本社があるカードは使用できなかった。(第153回(17年4月号)「北朝鮮のクレジットカード」参考)。

緊急事態には カードの流通に支障も

このように国家間の政治的な問題は、カードの流通にも大きな課題、話題になり、差し迫った問題にもなるから、海外のメディアでは大きく取り上げ

られることが多い。

私は89年の北京の天安門事件の際の日本人の緊急避難や、一昨年の武漢からの引上げの際にも、お金やカード絡みの問題が、報道はされていないが、あったのではないかと思っている。これからはこうした事件の際は、カードはもっと重要性を増すだろう。

天安門事件の際は、日本大使館緊急避難勧告により、在留邦人は北京を離れたが、「あわや戦争？」とも言わなければならない。銀行も開いていなかった。北京の全日空の空港事務所では日本向けの臨時便へ搭乗しようとする人のために、マネジャーが首を覚悟で判断し、ワープロ打ちした手製の航空券を作成し、お金がない人には名刺への署名で搭乗させるという超法規的な措置をしたという。外国人も乗せたという事で日本大使館からは叱責されたそうだが(証言・天安門事件を目撃した日本人た

ち)「ミネルヴァ書房、20年)。なお、私もこの本の五人の編集委員の一人で、2本の文章を書いている。

雪の降らない 北京で開催する理由

閑話休題。

さて、冬季オリンピックが北京で開催されると聞いて、皆さんはどう思われただろうか。私の長い居住経験では、北京には乾燥地だから雪はたまにしか降らないし、積もらない。運河はあるが大河はない。台風も来ないし、梅雨もない。近所にスキー場があった記憶もない。寒いから氷を使うスケートはともかく、スキー競技はいいところどころでやるのかという疑問がわいた。北京よりよほど離れた場所で行うのだろうか?ということだ。北京に詳しい知人にも聞いてみたが、市内でスキーを担いだ人を見かけたことは一度もないという人がほとんどだった。

北京には大きな川がなく水不足だから、歴史的に市内に井戸をたくさん掘った。それでも間に合わず、特に戦後になってから市内の北側の山の谷間にいくつかの大きな水庫(貯水池)を造った。東京で言えば多摩湖(村山貯水池)や小河内ダムのようなものだ。

北京の国際空港に着陸する少し前に、空港の北側に宇宙から見える唯一の建造物といわれる(?)万里の長城が見下ろせるが、その付近にある貯水池がそれだ。

今回の文章の「主役」になる張家口はそれより西北の方角にある。

北京では井戸を掘るほか、西隣の山西省からの水売りが各家々を歩き、水を売った。北京の銀座通りと呼ばれる王府井(ワンフーチン)はもともとここにあった井戸にちなむ地名だが、この町の発展にとって水が重要であったことを示す歴史的

な痕跡であるとも言えよう。これも余談だが、17年に出版した『北京を知るための52章』(櫻井澄夫、人見豊、森田憲司編。明石書店)に載せた8本の拙文のうち「王府井は本当はどこなのか?」という文章がある。他に北京におけるカード事情についても少し書いているので、お読みただけとうれしい(写真)。

スキー競技等の会場となった 張家口という土地

今回のオリンピックは、市の中心部の施設、市の北の延慶地区、河北省の張家口市の3カ所で行われたが、ジャンプ、ノルディック複合、スキー競技、スノーボードなどは北京から18



0キロから200キロ離れた張家口市内で行われたものだ。開会式、閉会式やスケートの各種目の競技は北京市内で行われたから、雪がない北京での冬季オリンピックでもおかしくないという意見はあるだろう。今回、オリンピックに間に合わせるように、北京市内から延慶を通過して、張家口へは50分ほど到着する高速列車や駅などの施設が建設された。以前は4時間くらいはかかったはずだ。

韓国での冬季オリンピックの際も、平昌はソウルからおよそ200キロ離れているが、新設のKTX(高速列車)でも1時間半くらいかかったそうだから、北京式なら「ソウルオリンピック」でもおかしくはなかった。

また、長野と東京も新幹線の線路では225キロあるそうだが、夏の東京オリンピックでも東京以外の場所で行われた競技もあったから、オリンピックの

開催都市名をどこにするかは、厳密には決まった規則はなく、政治的、経済的、知名度などにかかっているのだろう。しかし、今回のやり方はかなり「中国的」だと思う。

「人工雪に頼るといふことは、気候的にふさわしくない土地に五輪がやってきたことを意味している」というスポーツ環境学者の説を紹介している(Newswise, Timeなど)。

おそらくは中国政府は、雪深い遠隔地ではなく、知名度がある北京にして、ここを初めて夏と冬に開催した都市にしたかったのではなからうか。

そのため、イタリア製の製氷機を多数買い入れ、大量の人工雪で谷間やスロープを埋め、普通の山を冬のオリンピックの開催地にふさわしい場所に「仕立て上げる」必要があった。韓国も中国も「大国」になるには、国内で夏と冬のオリンピックを開催することが条件だと考えている、あるいはそれを自慢したいのだろう。違いますか。

このように雪がほとんど積もらない町でのオリンピックは初めてであろう。マスメディアも、「人工雪の祭典」と書き、

張家口に居住していた たぐさんの日本人

90年に香港から北京に転勤して、中国全土、そしてモンゴルから北朝鮮へと加盟店ネットワークの整備にかかわった。提携銀行も増え、最後は中国での訪問した都市の数は400近くに達した。張家口もそのような時に訪れた町の一つだった。

しておらず、外国人は自由に出入りできなかった。

現地の銀行の支店と連絡して、まずいくつかのホテルと加盟店契約したが、古くて小さなホテルばかりで、昔の日本のいろいろな政権といわれた蒙古聯合自治政府の首都であった時代からあまり変わっていない印象であった。終戦前にこの町には日本人が2万人いたそうだが、終戦直後に参戦したソ連に追われた各地の日本人がこの町に逃げ込み、一時は4万人に達したといわれる。大蔵省の若い官吏であった大平正芳元首相などもここに赴任して勤務していたそう

だ。
ここに戦争の末期に一時、西北研究所という日本の民族学や文化人類学の研究機関があった。戦後文化勲章を受章し、『知的生産の技術』などの著者としても知られ、国立民族学博物館の初代館長になった梅棹忠夫さんや、敦煌学や西域文書の

研究で有名な学士院賞受賞者の藤枝晃さんなど、若い研究者が居住していた。たとえ短期であっても、こうした日本人学者にとっては張家口やその周辺での調査や研究生活が、その後の研究成果に大きく影響を与えたことは、その著作物によって確認でき、評価も高い。

張家口の北に広がる モンゴルの大草原

この町の北側にある万里の長城から北の蒙古に向かう出口が大境門だ。この門を出ると景色はモンゴル(蒙古)一色であり、草原が広がる。元の都の一つである「中都」はこの地にあつた。その昔、この大境門を越えて駱駝の隊商が西へ、北へと向かい、また北京に向かう隊商がこの門を通過していった。

私は、日本人駐在員の皆さんがなさるゴルフはできないので、ガソリンが割り当て制で自由に買えない中国での状況に注

意しながら、仕事の「下見」を兼ね、あちこちに車を運転して出かけたが、自称「戦時中の軍人以外では最も中国で長距離を運転した日本人」とうそぶいていた。その頃、多くの日本企業では駐在員の運転を禁止していた、事務所の車は中国人の専門の運転手が運転していたので、大使館や一部の報道関係者しか自分では運転していなかった。私の事務所では最初、車は買ったが、運転手は私しかいなかった。

「ラクダ乗りが一番うまい日本人」というタイトルも自称したが、これは本人が言うだけだからかなり怪しいし、腕前はアラビアのロレンスには遠く及ばない。ただ、北京の北の草原ではまだ元気だった配偶者と蒙古馬の乗馬をかなり練習したから、今でもすぐ乗れるだろう(あれは小さいから簡単です)。

休日に車を走らせてこの町に行つたことがあるが、途中の

荒々しい黄土の景観は忘れられない。今は近代的なホテルもできてくるようだから、今回のオリンピックの日本人の関係者がクレジットカードを使ってくれたか、第一号の利用者としては聞いてみたい気がする。

ここで「辺ぴな場所」と思われている張家口の宣伝と、名譽回復をしておくのも、今後日本人にとっては忘れられない場所になると思うからだ。北京オリンピックの日本選手の3個の金メダルのうち小林陵侑、平野歩夢選手の2個は張家口でつたものだ。

日本のカードの発展に貢献した 64年の東京オリンピック

64年に東京オリンピックが開催された年、私はまだ東京の高校生だった。父が日本バレーボール協会の役員だったので、オリンピックにも参加し、役員用の青いジャケットを着ていたことを覚えている。そのほんの少

し前に、日本でも汎用型のカードが誕生していた。

諸書を見ると、日本の汎用型のクレジットカード業務が開始されたのは、60年、あるいは61年と書くものが多い。60年12月に日本ダイナースクラブが設立され、61年1月にJCB(当時は日本クレジットビューロー)が設立されたが、カードの発行は61年の2月ないし3月のことだった。

しかし、これらをもってわが国のカード業務の嚆矢とするのは正しくない。カード業務とは、カードの発行と加盟店の整備とが車の両輪になるが、一般に、特にカード後進国や経済的には必ずしも発展していない国では、外国人を主たる対象にしてアクワイアリングからカード業務は始まる。日本の場合も例外ではなく、50年代にアメリカのT&E系のクレジットカードが業務を開始していた。60年のオリンピック開催に日本は手を

上げたが、それに間に合わせようとアメリカのダイナースクラブとの提携で日本にも加盟店をつくろうと手を上げた人がいた。しかしながら、東京でのオリンピックは実現せず、開催地はローマに持っていかれた。その前後にダイナースクラブは少数ながら加盟店を日本国内に有していたといわれる。

一方、アメリカン・エキスプレスは、旅行会社として、あるいは駐留米軍の兵士のための金融サービス会社として日本国内で業務を行つていて、各地に事務所があつた。61年にJCBが日本国内でカード業務を開始する時点で、アメリカン・エキスプレスはすでに50ほどの加盟店を有していた。

それより以前にアメリカで発行されていた、多数の航空会社で利用できるAir Travel Cardが日本でも使用されていた。太平洋路線のパンナムなどの航空券の購入に使用されていた(連

載の第14回、15回、16回(05年7月号、8月号、10月号)「航空会社のクレジットカードの歴史」。

このようにして、徐々に、日本でもクレジットカードが受け入れられ、カードの普及が図られた。オリンピックはその重要な契機になったわけであり、前述のように中国などでもオリンピックが同国のカードの発展・普及のためには大きな役割を果たした。

アメリカ駐在の第1号として 加盟店開拓に奔走

卑近な例だが、私が最初に海外駐在したのは、84年のアメリカのロサンゼルスオリンピックの直前だった。JCBは81年に独自の国際展開を図ることとなり、加盟店網づくりを力を入れたが、世界の国際ブランドに先駆けては北京に最初のカード加盟店を5軒つくつた。81年3月18日に最初にカードを使用した

四人の中に私も入っていた。その後、より積極的に業務を推進しようとして、84年にアメリカとイギリスに自社の駐在員を送つたわけだ。こうして「最前線専門」の私はアメリカ駐在の第1号になり、アメリカとカナダを担当した。出向先は日本航空系の旅行会社の事務所であった。

まず、日本からの旅行者の多い店や施設でのカード利用環境の整備や、ホテルやレストランの紹介や予約、現地金融会社でのキャッシングサービスの実施など、いろいろな業務に当たつた。

カードの発展の上での張家口の位置を示すのは難しいが、オリンピックとペイメントカードやモバイル決済の関係を編年的に見ていくのも、一つの見方としておもしろいのではないかと感じる。

高梨沙羅さんにも、張家口で金メダルをとらせたかった。◆